

目的 近年、2本針4本糸のオーバーロックミシンを本縫いミシンの代用として、家庭や教育の場で使用されるようになってきた。このミシンの特徴は、従来工業用ミシンにしか見られなかった差動送り機構が備わっていることで、伸縮素材の縫製の問題点の一つであった縫い縮み、縫いずれを調節・緩和することができるというものである。このようなことから、需要の多いニット衣料の縫製用として普及しているようである。しかし、主送り量と副送り量の比（差動比）はダイヤルゲージで表示されているが、設定の基準、扱う素材との関係も不明瞭であり、経験によりその量を決めているようである。本報告では、教育指導上の資料を得る目的で、編布を用いて地の目方向と適正な差動比との関係を調査研究した結果を述べる。

方法 試料布は綿100%のスムース、使用ミシンは2本針4本糸の家庭用オーバーロック（ジャノメMY LOCK 534D）、縫い糸はポリエステルスパン糸80/3z、ミシン針は#11、縫い速度は1200spm、押さえ圧は1.9kgである。実験要因には地の目と送りピッチを取り上げ、前者は5段階、後者は2段階とした。5cm×40cmの布片の長さ方向25cmに印を付け、中表の2枚重ねを縫い試料とした。差動比は、ダイヤル表示目盛で1:0.7から1:1.5までの6段階とした。

結果 地の目方向により、また送り量により、縫い縮み・縫い伸び量は変わり、適正な差動比も変わった。しかし差動比の設定が比較的粗く、ミシンに適正な差動比を与えることがむづかしいという問題が存在することなどがわかった。